

広島市が六日、中区の平和記念公園で営む原爆死没者慰霊式・平和祈念式(平和記念式典)に、市が各都道府県から一人ずつ招いた遺族代表四十一人が参列する。あの日から六十一一年。遺族の高齢化も進み、最高齢は八十六歳で、二〇〇一年以降、最も高くなった孫世代も二人おり、最年少は二十六歳。取材に応じてくれた遺族に肉親を失った無念や悲しみ、次世代へ託す平和への願いを聞いた。

(敬称略)

眞田 保68 北海道
母イツノ、05年11月3日、96歳、腎不全
天満町で営んでいた美容院で被爆し、ガラスが胸に刺さったと言っていた。数カ月後、兄弟を頼り、子ども3人を連れて北海道に移った。父は原爆投下前に病死したため、女手一つで大変だった。原爆を思い出さずからと雷が嫌いだ。

藤田 和恒60 青森
母俊子、46年9月3日、22歳、心不全
私を身もついていた母は市内で被爆し、出産後半年して亡くなった。一緒に被爆した父は当時の話をほとんどせず、母がこぼれた話も分らない。母の記憶も分らないが、祖父母からもらった母の写真は、今も肌身離さず持っている。

上原 芳智51 岩手
父高橋芳信、06年3月15日、79歳、前立腺がん
父は陸軍の船舶特別幹部候補生隊に所属し、香川県の小豆島でボートに爆弾を積んで特攻する訓練を受けていた。原爆投下後、広島に入り、遺体処理に当たった。19歳という多感な時期に遺体の山を目の当たりにし、つらかった。

伊藤 勝67 富山
叔母石工エミ、45年8月8日、28歳、被爆死
叔母は天満川の土手で亡くなった。背中にとどろき、火の海から逃げようとして力尽きたのだろう。被爆直後、火に包まれた家にいた幼い長男と長女を助けられ

中村 千史(46) 愛媛
母大野美矢子、04年9月9日、73歳、心不全
千田町の自宅で被爆した母は、原爆のことはあまり話さなかった。死の間際まで、母の姉妹が4人も原爆で死んだとは知らなかった。毎年、式典のニュースを正座して見ながら「広島へ供養に行きたい」と話していたのが忘れられない。

松本 誠代(56) 広島
父森原正生、04年12月9日、79歳、膀胱がん
日本被団協や広島県被団協の役員だったが、具体的な体験は聞いていない。かんを宣告されて記したメモに触れてあるかもしれないが、今は読む勇気がない。年ごとに被爆者の老いが深まるのが分かり、次世代に語り継ぐ責任を感じる。

平和記念式典参列の都道府県遺族代表

「記事の読み方」遺族代表の名前と年齢、都道府県名。亡くなった被爆者(西暦)の名前、死没年月日(西暦)を2けた、当時の年齢、死因、遺族の一言の順。欠席は、柘木、群馬、岡山、高知、宮崎、沖縄の6県。

竹内 康三75 埼玉
父彦一、79年8月21日、94歳、老衰
父は母の弟の家で被爆した。五日市の実家に帰ってきたが、顔中に傷があり、痛々しかった。40歳の熱が出て3カ月も寝込んだ。子どもながら、もう駄目じゃないかと感じた。「原爆」

山口 淑子74 神奈川
父稲葉誠一、87年10月2日、87歳、心不全
父は橋本町の自宅で被爆し、倒壊した家の下敷きにならなかつた。死後見つけた短い手記には「屋敷から人とは判別できないほど焼けけた遺体が、次から次へと運ばれてきた」と書かれていた。惨劇を残さず考えたのかもしれない。

北村 優子60 富山
父島田直治、96年11月7日、80歳、脳梗塞(脳卒中)
父は軍人で、職場へ向かう途中で被爆した。そのまま倒れ込んで意識を失ったと話していた。いつも「体がだるい」と体調不良を訴えていたように思う。自分も母の胎内で被爆した。核兵器だけではなく、世界中の武器根絶を切に願う。

岩谷 泰子(58) 鳥取
父明、05年5月1日、88歳、肺炎
陸軍の小連隊班長で市内警備中に横川駅付近で被爆した。部下10人は全員死亡、自

大井 勝生(44) 香川
祖父伝市、00年3月7日、91歳、肺炎
旧陸軍砲隊に所属して被爆したらしいが、原爆のことはほとんど話さなかった。式典参列は2回目。前回は、遺族会館を見学、遺族の話を聞いて被害のすさまじさを話聞けよよかったと悔やまれる。

木下 俊夫(74) 山口
父清一、45年8月6日、52歳、被爆死
父は吉備橋周辺の建物の解体作業中に被爆、即死した。長兄や長姉も一緒だった。手亡胸を合わせると、父や兄弟が苦しくなる。以前は盛大な式典には抵抗があったが、年を重ね、受け入れられるようになった。



町を破壊し尽くした被爆の惨状を発信し続ける原爆資料館。鎮魂と平和を祈る「あの日」が再びめぐり来る。(広島市中区)

核廃絶の願い 次世代へ

が、夫が体調を崩してかなわなかった。夫の遺影を手に広島を訪れた。

小林 沙絵26 長野
祖父由人、05年12月11日、80歳、心筋梗塞
祖父は陸軍にいて8日に入市被爆した。日照りとは異なる何とも言えない熱さが足裏から伝わってきたと祖母に語っていた。私は被爆当時の様子については知らないが、祖父の気持ちに少しでも触れるため、式典への参列を決めた。

岩瀬 愛子51 岐阜
父小林健、06年3月13日、82歳、がん性腹膜炎
父は戦艦大和の元乗組員

藤田 和子73 京都
夫将、05年9月2日、76歳、心不全
学徒動員先の南観音町の工場内で被爆し、実家のある神戸高原町まで一晩かけて歩いた。電車の座席に腰掛けのまま息絶えた遺体も見たという。口は重かったが、核兵器使用は二度とあってはならないと世界が全滅してしまおうと言っていた。

久保田 菊男68 大阪
父松蔵、45年8月6日、54歳、被爆死
父は現在の中山中町の自宅から勤務先に向かい戻らなかつた。長く行方不明だったが、40年ほど前、広島東署で見つかった罹災のさい(者)を簿に名前があり、つと帰ってきた気がした。式典では、元気でやってみると伝えたい。

山井 公子66 兵庫
父赤畑治信、45年8月6日、36歳、被爆死
軍人だった父は8月6日、広島に来るまよう言われ、5日後、竹原市の忠海駅を出た。姿が見えなくなるまで汽車から手を振ってきた。直後に祖母と広島を訪ねたが、どこで死んだかも分からず、年の近そうなる人の遺骨を持って帰った。

石井 伸和55 和歌山
父文一、02年2月25日、82歳、事故死
江波の病院に入院中に被爆した父は、一瞬で多くの命を奪った原爆の恐ろしさを死ぬまで忘れなかった。原爆ドームに来るといつも、当時を思い出して顔をこわばらせていた。原爆を絶対許さないと言っていた父の思いを胸に参列する。

坂井 幸枝86 福岡
一男政雄、03年7月15日、59歳、多発性肝臓がん
赤ん坊だった二男を抱いたまま富士見町の自宅で被爆。家の下敷きになった。疎開先から戻ったばかりだった。二男は直腸や多発性肝臓がんになり、肺や腎臓、脊髄(せきずい)と次々転移した。思い返すと、平和の大切さをつくづく思う。

長谷川 美61 佐賀
父一郎、45年8月13日、41歳、被爆死
父は比治山近くの自宅から出勤中に被爆した。以島にいて聞いた母は、私をおぶって行き、父の遺骨を受け取った。父の記憶はほとんどないが、式典参列のたびに、思いがめぐると、6歳の孫を連れて行き、戦争の愚かさを伝えた。

山岡 節76 大分
夫吉夫、05年7月9日、89歳、肺炎
夫は工場作業中に被爆した。翌日、「水がほしい」と少年からせがまれ、しかし飲ませてあげることができず亡くなったという。短歌教室の講師を務め、その無念さを詠んできた。毎年、墓参りに訪れた広島で後悔していた。

八木 繁57 長崎
母マヌ、06年2月3日、96歳、肝硬変・心不全
母は南観音の自宅で二女と長男と被爆した。父の死後、行商などをして女手一つで育ててくれた。米國を恨まず、「許すことが平和につながる」といつも話していた。式典に参列したが、つらかった。

田中 鶴子65 熊本
母フミ、05年5月24日、92歳、心不全
母と弟と一緒に横川の自宅で被爆した。みんなを妹を捜したが、見つからなかつた。爆風で竹が刺さった左耳の後ろの傷がうずく、母の背中やけつを思い出す。当時の様子を何も聞かなかったことを、今は後悔している。

福元 実典58 鹿児島
父統、04年10月5日、88歳、胃がん
軍人として宇品で被爆、広島駅で遺体処理に当たった。「見るに見られない作業」と聞いた。孫などに戦争や原爆の恐ろしさを語っていたが、私はいつか聞かされた。聞かされた後悔している。二世として平和を訴える責任を思う。

惨状語り継ぐ責任／夫の思い胸に臨む

部と言話原の爆の惨状を語り継ぐと父壇の前で約束した。

竹谷 博(77) 島根
母カツ、64年8月9日、81歳、直腸がん
羽衣町の自宅で被爆。その年の10月、安来市の父の実家に移ったが、内臓疾患は悪化した。「人生も生活も犠牲にされた」と戦争を恨んでいた。母のためにも、県原爆被爆者協議会の会長として、戦争反対と核兵器廃絶を訴えていく。

核廃絶の願い 次世代へ

にあらたためて考えた。

伊藤 哲郎68 東京
母千又、49年6月6日、34歳、胃がん
母は原爆投下の翌日、いとこを探しに行き、入市被爆したが、結局、何も見つからなかつた。病床でも「死体」においがする。当時母を思い出していた。最近原爆請したの、やっと原爆死没者名簿に載る。仲間ができて喜んでいと思う。

証言続けた父に誇り／薄れる反戦意識心配／平和の大切さ訴える

にあらたためて考えた。

長谷川 淳子77 山梨
夫寛、06年5月8日、75歳、肺炎
夫は当時中学2年。学徒動員先の広島市郊外で閃光(せんこう)を見た。友人を火葬したらしい。山梨の中学で子どもたちに惨状を証言していた。05年に夫婦で初参列する予定だった。